

無目的症候群は

自分の将来像が見えず、進路選択に対する意識が希薄な生徒たち。教師は生徒にどう働きかけるべきなのか。

特集

教育環境はいつ変わっているか

そんな今、行いつべき進路指導は……

【目的意識の低下 高校生の家庭学習時間は年々減っており、総じて学習意欲は低下傾向にある。その理由としては、生徒が学ぶ意義、目的を見失っていることが大きいと想定される。

【悩める教師たち アンケート調査によると、生徒の進路意識が希薄になっていいると感じている教師が増えている。生徒の進路意識を高めるために、教師は新しい進路指導のあり方を模索しつつある。

【大学全入の時代へ カリキュラム改革など大学の個性化が進んでいる。また、えり好みしなければ大に入れる全入時代がやってくる。自分の人生観、価値観を基にした進路選択が大切になっている。

【自己理解を促す 生徒たちに「どう生きたいか」を考えさせる。生徒が自己を深く理解するような機会を作る。そこから進路の可能性を広げ、具体的な目標につなげる。

【職業観を育てる 職業へのあこがれを刺激しながら、職業観を広げる。さらに生徒自身による職業研究の方法を具体的に提示し、生徒同士が職業観を触れ合える環境を作る。

【志望校を決める 難易度以外の大学を比較するための視点を生徒に示す。目標が決まった生徒には学習上の課題を自分で考えさせ、その解決方法を発見させる。

進路指導で救えるか

教育環境は

どう

変わっているか

低下する生徒の目的意識

	ほとんど毎日	週に半分以上	週に半分以下	週に1日	ほとんどない
平成2年	28.2	24.0	21.3	7.5	17.3
平成8年	22.0	22.9	23.2	8.3	23.4

(%)

生徒の学習習慣は、失われていく方向へとシフトしている

ベネッセ教育研究所「学習量調査」より、「週に半分以下」「週に1日」「ほとんどない」がいずれも増加。過半数の生徒は授業の予習・復習を満足にできていないといえる。別の調査では、国立大合格者100名以上の高校で、「家庭学習は週0日〜半日以下」と答えた生徒が33%に上る。生徒は家庭学習から逃避しているといえないだろうか。

家庭学習の時間と生徒の意欲は下降の一途

【高 校生の家庭学習時間のめやすは学年プラス3時間とよくいわれる。1年生は1プラス3で4時間、2年生は5時間……というわけだが、現実にはこれだけの学習量を毎日こなしている生徒は少ない。DATA 「高校生の家での勉強の頻度」

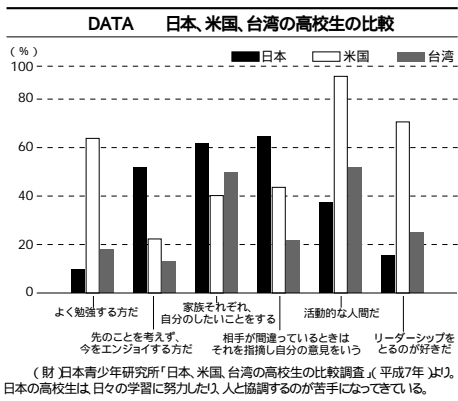
では、高校2年生の学習時間の平均は平日1時間17分。さらに、約4人に1人の生徒が家庭学習を「ほとんどない」と答えている。これでは日々の授業が生徒の準備不足で思うように進まないという、いわば授業不成立の状態に陥りかけているケースがあることも

不思議ではない。

しかも、生徒の勉強時間はさらに減少する傾向にある。このデータで家庭学習の状況を平成2年と8年で比較すると、「ほとんど毎日勉強する」生徒が6・2ポイント減り、反対に「ほとんどしない」が6・1ポイント増えている。

なぜ生徒の学ぶ意欲がここ数年低下してきているのだろうか。DATA 「日本、米国、台湾の高校生の比較」は現代の日本の高校生像を探るうえで興味深いデータだ。「よく勉強する方だ」と答えた生徒は3国中最下位の9・9%だが、「先のことを考えず、今をエンジョイする方だ」という生徒は51・7%で、他国の生徒を大きく引き離している。将来のことを考えてコツコツ努力するのではなく、今が楽しければいいという刹那主義的な高校生が多いことがつかがえる。だがこれは、生徒の質が落ちてきたというより、最近の生徒は明確な将来像を持っていないため、今を真剣に生きる意欲も低くなってきているからだとは考えられないだろうか。

【か つての日本には、有名大を卒業して大手企業に就職するのが、目標とすべき人生であるという考え方があった。それにより豊かな経済力を獲得することが幸福



しかしバブル崩壊以降、日本社会全体が目標を失ってしまっている。一方で国民全体の経済力も一定レベルにまで達しており、「豊かになるために勉強しなくてはいけない」といった向上心を持つ必然性も薄くなってきている。そのような状況の中で生徒たちの意識を再び学習の方に向かわせるには、従来の動機づけとは異なった進路・学習指導が必要といえる。

教育環境は
どう
変わっているか

重要性高まる進路指導

	困っている	どちらとも いえない	困っていない
生徒の進路が多様で 指導するのが大変である	37.8	45.3	16.9
生徒に役立つ情報が少ない	16.7	62.2	21.1
生徒がなにを考えているか つかめない	28.6	58.9	12.6
教員に役立つ情報が少ない	16.3	65.7	18.0
効果的な進路指導の 教材・資料が少ない	26.7	58.0	15.3
高校としての進路指導の ノウハウが不足している	22.5	58.9	18.7
生徒の進路に対する意識が低い	57.2	34.5	8.4
多忙のため、個々の生徒に 対応する時間的ゆとりがない	67.1	28.9	4.0
教員の職業に関して持っている 知識・情報が十分でない	32.7	61.2	6.1
保護者の理解を得るのが難しい	16.7	66.4	17.0
教員間の共通理解が得にくい	20.0	62.4	17.6
教員の指導力に バラつきが大きい	30.4	57.6	11.9

(%)

生徒の質の変化に
対応する新たな進路指導を
模索中

ベネッセコーポレーション「全国高校進路指導に関する意識調査」によると、生徒の希望や適性に合った進路指導をしようとしても、生徒自身が将来を考えようとしていない状況が前に悩みを抱えている教師が多い。また、「生徒がなにを考えているのかわからない」「進路意識が希薄な一方、生徒の進路は多様化しています。指導が難しくなっている」という声も多

生徒の将来像を明確にする 新たな進路指導が必要に

意 欲的に学習に取り組む
生徒が減ったと感じると

いう教師の声を聞くことが増えている。予習・復習をやらない、授業を真剣に聞かない、教科書も進まないといった悩みを抱える教師は少なくない。そして、学習意欲の低下だけでなく生徒の質的变化に戸惑いを感じている

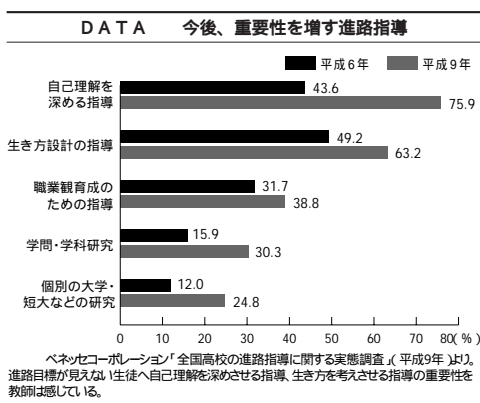
教師も多いようだ。DATA 「教師が進路指導上困っている点」では、項目の中から、特にポイントの高いものを挙げていく。ここから、教師は今の生徒に対して「なにを考えているのかめない」「生徒の個性に合った進路指導をしようとしても、生徒自身が自分の進路と向き合おうとしない」といっ

た思いを抱いているのがわかる。学習意欲が低下しており、進路意識も希薄な高校生が増えつつある。

こうした生徒の質的な変化に対応して、新たな指導のあり方が課題となっていることが、DATA 「今後、重要性を増す進路指導」を見てわかる。平成6年と平成9年で同じ調査を行ったものだが、3年の間でどの項目もポイントが伸びている。そして、その中でも特に教師が重視しているのは「自己理解を深める指導」と「生き方設計の指導」である。

自 己理解を深める指導」と
は、自分はどうなことに

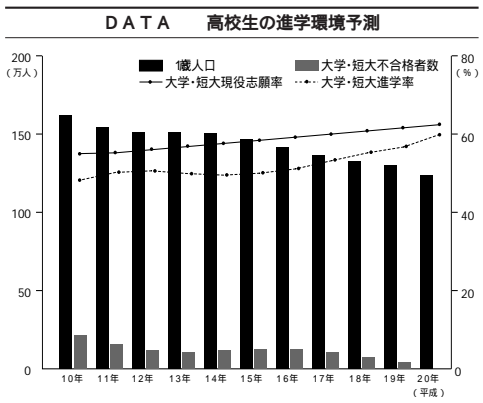
興味があるかを見つめさせ、社会に対する考え方などを生徒自身の力で発見して深めていく機会を持たせる指導のことである。最近の高校生は、将来に対する目的意識だけでなく、今を生きるための価値基準も揺らぎやすいといわれている。例えば平成8年に行われた福武教育振興財団による「高校生の進路観に関する調査」では「1人で初めてのことをするのが不安である」と答えた生徒が52・6%、「決心したあとでもよくぐらつく」が50・5%にも上った。そんな中で、自分とはなにかを生徒に見つめさせ、自己確立を促すために「自己理解を深める指導」が重



これらの指導に力を入れる高校は徐々に増えつつある。試行錯誤を重ねながらも、新たな進路指導の方向性を教師は模索している。

教育環境は
どう
変わっているか

変わりゆく進学環境



18歳人口の減少とともに
大学・短大不合格者数は
大幅に減っていく

ベネッセコーポレーション「高校生の進学環境予測」(平成10年)より、平成5年度には約40万人に上った大学・短大不合格者数は、5年後の平成10年度には約半分の約21万人にまで減少。その3年後の平成13年度にはさらに半分の約11万人にまで減ることが予想される。全入時代においては、大学受験だけを目標にした指導法が次第に効力を失いつつある、ともいえるだろう。

大学は全入時代に、 企業はますます実力社会に

平 成4年度、約205万人
とピークを迎えた18歳人

口は、その後は減少の一途をたどっており、平成17年度には約137万人にまで減ると予想されている。一方、大学・短大の入学定員は現在約71万人。今後は若干の定員減が予定されているが、2、3万人程度の減員にすぎない。

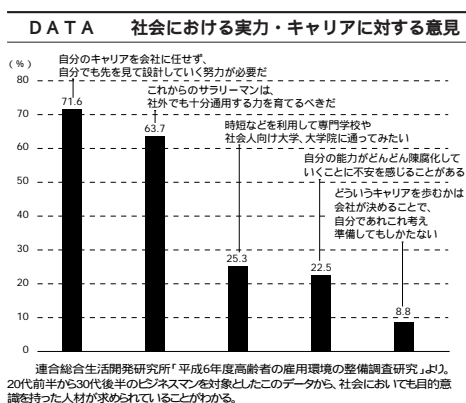
そのため、大学・短大入学者数を志願者数で割った大学・短大入学率は、平成10年度は約79%だが、平成20年度にはほぼ100%に達すると想定される。いわゆる大学全入時代の到来である。大学全入時代は、大学にとって冬の時代でもある。大学によっては今後定員割れとなる可能性もあり、また私立

大は貴重な収入源である受験料が減少していく。これは、いわゆる有名大でも無関係なことではなく、優秀な学生を数多く確保するための工夫や努力をすることが必要になる。そのため、受験生にとってより魅力的な大学になるために、各大学で進行中のカリキュラム改革や入試改革などの大学の個性化は、今後いっそう加速するはずだ。大学の個性化により、同じ難易度の大学でも、スペシャリスト養成志向の強い大学、ゼネラリスト養成志向の強い大学など、大学の姿は多様になるはずだ。受験生は、従来のような偏差値を基準とした大学選択だけでなく、志向や適性、教授陣や施設の充実度などを見極めて大学を選ぶ時代になる。

大学全入時代の到来は、えり好みしなければ努力しなくても大学に入れることを意味する。大学合格だけを学習の動機づけにすることは、次第に効果を失いつつあるのではないだろうか。そこで、進路指導では「自己理解を深める指導」「生き方設計の指導」を重視することが、やはり重要になってくる。

企業が求める人材像も、変わりつつある。社会は、大量生産、大量消費の時代からきめ細かなサービスの時代に移行したといわれている。一つの商品を大工場で大量

に作っていた時代には、均質な労働力が求められた。だがサービスの時代では、企業は多様なニーズに対応した機敏な行動ができなければ生き残れない。時代の流れを的確に読む力、自ら問題を発見し解決する能力を持った人材がより求められるようになってきた。高校現場でも、いわれたことだけをこなす生徒を育てるのではなく、より生徒の主体性や創造性を育む教育が求められている。その点でも、進路指導の果たす役割は大きいといえる。



無目的な症候群は
進路指導で
救えるか



そんな今、
行つべき
進路指導は……

自己理解へのしかけ作り

自分の興味を 具体的な目標につなげる

生徒たちのやる気を振り起こし、目的意識を持たせるために、教師はどのような指導が必要か。生徒の心を揺さぶり、ひいては日々の高校生活への取り組みを意欲的なものにする、生き方指導としての進路指導の要点を考える。

興味から考えさせる

自分の興味の 再確認をさせる

難関大に合格しさえすれば幸せな生活が保証される。そんな一元的な価値観はもはや生徒には通用しない時代となった。そこで重要になってくるのは「どう生きたいのか、そのために何を学ばなければいけないのか」を生徒に考えさせること。そのためには、大学時代だけではなく、生徒に自分の人生全体を思い描かせるような働きかけが求められる。

「どう生きたいのか」を考えるうえで大切になるのは、自分の興味・関心である。自分の興味・関心を再確認し、将来をどう生きたいかが見えてくれば

今度はそれを実現するためにはなにをしなければいけないかも見えてくる。

自己理解を促す

長所・短所を分析させ、 本当の自分を知る

「どう生きたいのか」を考えるとき「自分はどんな人間なのか」を考えさせることも大切だ。自分の長所・短所はなにか、どんなことだと一生懸命になれるかなどを自分自身に問いかけて、自己理解を深めていく。そうしていくことで、生徒は「自分はこんな人間だから、将来はこう生きていきたい」と進むべき進路がぼんやりと見えてくる。そこで、生徒が自分を見つめる機会を教師が作ってやるのが求められる。例えば、入学時や進級時などに、「今ま

での自分とこれからの自分」といったテーマで小論文を書かせるなど、さまざまな取り組みが考えられるだろう。

進路の選択肢を増やす

生徒の好奇心を 刺激するしかけ

最近の高校生は「自分が好きなことには夢中になるが、興味のないことに対しては全く取り組もうとしない」といわれる。高校時代に将来の目標、進路を決めることは大切だが、無理に絞り込まずに、進路の選択肢を増やすことも同じくらい大切だ。興味の方向が偏りすぎた生徒には、今まで気に留めていなかったものに目を向けさせる。また、日々の授業などをとおして知識を吸収していくことは、

自分が興味を持っているテーマを深めることだけでなく、未知のものに対する好奇心を育てることもつながることを理解させたい。生徒の興味を新たに呼び起こすことも重要になる。

具体的な目標につなげる

興味・関心を 職業、学問へつなぐ

自分の興味・関心の対象が見えてきて、自己理解も深まった生徒には、今度は具体的な進路の目標を設定させる。その際に鍵になるのは、やはり職業と学問だろう。自分自身を見つめる中で浮かび上がってきた「将来やってみたいこと」は、どんな職業に結びつき、どんな大学の学問につながるのかを考えさせる。そのためには、生徒に職業学問について調べるための具体的な方法を提示し、その取り組みを支援する場を3年間の指導スケジュール中に組み込んでいくことが必要だ。

進路指導は生徒が自分の生き方を考える取り組みである。そのため、すぐに結果が出るという性格のものではなく、進路意識の醸成とそれを基にした進路選択の作業には時間がかかる。中・長期的な視野でじっくり生徒に進路学習に取り組ませるためにも、早期の指導が求められているといえるだろう。

そんな今、
行つべき
進路指導は……

職業観の育成

多くの職業に目を向け、 なりたい自分を見つめる

生徒はこれまで狭い世界で生きていて、職業も意外と限られたものしか知らない。まず、社会には数限りない職業があることに気づかせ、視野を広げさせることが必要になる。そのしかけは、書籍の推薦などの比較的手軽なものから、職場見学のようなものまでさまざまなものが考えられる。

職業観を広げる

いろいろな職業に 目を向けさせる

生徒は職業を考えるとき、今流行っている仕事、安定している職種はなにかといったことに気をとられることがある。だが、そういったアプローチは必ずしも「なりたい自分像」と合致するとは限らない。また、現在安定している職業が将来も安定しているとは限らないということも伝えたい。

また、生徒は科目の好き嫌いから、職業を考えよつとする傾向がある。低学年次では特に、あまり科目とは結び

つけず、純粹にやりたいことから考えさせた。例えば、数学が苦手な生徒が臨床検査技師などの医療技術者になるつと考えても、医療技術系学部は入試科目に数学を課すところが多いので、生徒は「自分には無理」とせつかくの目標を変えよつとしかねない。こういった生徒に希望や夢を実現させるように指導してやるのが大切だ。

研究方法を提示する

生徒自身に 具体的に調べさせる

「職業について考えなさい」と指示するだけでは、生徒はなにをどうすればよいかわからない。具体的な取り組みを教師が提示する必要がある。

この際に重要なのは、生徒に自分で調べさせるということ。資料を渡すだけ

で終わるのではなく、職業研究のための資料にはどんな種類があるか、それらを使ってどういった手順で調べればいいのかを紹介する。教師が資料を渡すだけでは、生徒は受け身の姿勢から抜け出すことはできない。

生徒が個人でできる取り組みとしては、さまざまな職業を紹介した本を読む、保護者を頼って職場を訪問し、働くということを考えてみる、などが挙げられる。最近では、学校ぐるみで官公庁や企業を訪問する高校もある。さら

に、インターネットを活用し、社会人になった卒業生にメールを送り、仕事について聞く方法も考えられる。こうした取り組みは比較的時間がかかるので、自由時間が多い夏休みなどを利用して生徒に取り組ませたい。

成果を発表する

他者から学ばせ 視野を広げる

それぞれの生徒が関心のある職業について調べたら、今度はそれをレポートとして書かせ、クラスごとにLHRなどで発表させる。

クラスの中には職業への意識が飛び抜けて高い生徒が必ずいるものである。そういった生徒のレポートを聞くことで、ほかの生徒は「あいつは人生についてあんなに深く考えているのか。では、自分はどうかだろう?」と自らを振り返ることができるといえる。ときには教師のアドバイスよりも生徒の発言の方が影響を与えることもある。

レポートにまとめる作業をとおして自分の考えを整理するだけでなく、他者の発表を聞くことで自分とは違う職業観、人生観に触発される。生徒の視野をさらに広げ、職業研究を個々の内面で継続させることができるだろう。

無目的症候群は

特集

進路指導で 救えるか

そんな今、
行つべき
進路指導は……

学問、学部・学科研究

興味・関心を軸に 学びたいテーマを探させる

学問観を広げる 学問研究の道筋を示し 多様なアプローチを促す

学問研究には二つのアプローチ方法がある。一つは就きたい職業に近づくためには、どんな学問を学ぶ必要があるかというアプローチ。もう一つは、「大学で、学を勉強したい」という学問に対しての直接的な興味からのアプローチだ。生徒には学問研究にはこのような二つの入口があることを、概念図などを示しながら理解させておきたい。

生徒は大学の学問といっても文学や医学、経済学など、限られたものしか知らないことが多い。大学ではさまざまな学問分野の研究が行われており、高校生が日常生活で抱くさ細な興味でも、十分に研究対象となることを理解

させたい。そして、科目の得意、不得意だけを基に志望学部・学科を決めることがないように生徒に指導したい。

生徒にある学問の内容が見えてきたら、その学問で取り組みたいテーマは、ほかの学問領域でも扱っているかどうか、視野を広げて考えてみるよう勧めたい。例えば、環境保護というテーマは、農学や生物学だけでなく、法の整備、行政レベルの取り組みの研究といった法学や総合科学の観点からでもアプローチできる。生徒には、取り組みたいテーマにどのようにアプローチしたいのかまでしっかりと考えさせる。

また、特に低学年次では、一つの学部・学科にあまり急いで絞らせないようになりたい。例えば、薬学にも建築学にも興味があるという場合は、無理に一つに決めずに両方を念頭に置いた学問研究に取り組ませる。

研究方法を提示する

シラバスで調べ、 見学会で体感させる

学問、学部・学科研究では、中学校や高校の教科レベルにとらわれない、大学の学問領域の幅広さや奥深さを生徒に実感させることが大切だ。ここでも職業研究と同様に、生徒が自分で調べ、考えることが重要になってくる。

まず、進路指導室などにある大学案内やシラバス（講義要項）を基に、講義や研究内容を調べさせる。また、夏休みなどに行われるオープンキャンパス（大学見学会）は、大学生の研究活動の様子を垣間見るチャンスになる。また、インターネットの検索エンジンを利用してキーワード検索で、自分の興味あるテーマを研究している大学の研究室を探すこともできる。

そんな今、
行つべき
進路指導は……

大学研究

大学の個性に着目させ、 意志を持続させる

オープンキャンパスなどが役に立つ。その大学の卒業生の進路、学部・学科の研究上の特徴、教授陣の充実度、学風、キャンパスの環境、学費などを調べさせ、最も自分に合った大学を見つけさせたい。インターネットで各大学のホームページにアクセスすることもできる。

大学といつても、地元の国立大しか知らない、という生徒も少なくない。職業研究や学部・学科研究で得られた

成果を、具体的な進路に結びつけるためにも、さまざまな大学の中身に目を向けさせる指導が求められるのではないだろうか。

目標を維持させる 成績変動に動揺させず 生徒を乗せる助言を

志望校が固まってくると、生徒は自分の成績の変動にそれまで以上に敏感になる。目標が見えてきたことによつ

卒業生や教育実習生に学部・学科の概要、学んでいる学問の内容を話してもらつのも一案だ。リアリティーのある学問の魅力が伝われば、それは生徒の大学への意欲をかき立てるだろう。

成果を発表させる

調べた事実を クラスで共有させる

学部・学科への興味が決まってきたら、レポートとして書き出させてみる。各大学のシラバスなどを基に「学内内容の概要」「興味を覚えた講義」「研究に必要な施設・設備」「卒業後の進路」などを調べさせるといいだろう。作業にはまとまった時間が必要なので、比較的自由的な時間が多い夏休みなどに行うといい。

レポートはクラスの生徒同士で閲覧できるようにしたい。自分が知らなかった学問の存在を知り、その魅力に気づいたり、同じ学部・学科名でも大学によつて研究内容が異なる場合があることがわかったりする。

学部・学科研究が一段落したら、個々の生徒の志望の度合いを面談などで確かめる。そして、特に複数の学部・学科で迷っている生徒に、生徒の気がつかない比較の視点など、アドバイスをしてみてもいいだろう。

て、学習への関心が高まった証といえるよ。だが、生徒が模試の成績などを見て「やっぱり成績が悪いからこの目標は無理だ」とすぐにあきらめてしまつては今までの取り組みが無駄になる。特に、1、2年生の段階では、成績の多少の変動に一喜一憂することなく、目標に向けて前向きに学習に取り組みよつに指導したい。

そして、生徒のよいところ、これから伸びそうなところを見つけ、励ますことが必要になる。目標が明確になってきた以上、生徒は自分の状況に合った、目標達成のための具体的アドバイスを期待する。そこで、生徒とともに学習上の問題点を探り、「なぜ成績が下がったのか、上げるためにはどのように勉強すべきか」を生徒自身に考えさせ、対処法を発見させる。

学習指導も進路指導も、教師の押しつけでは効果は薄く、あくまで主体は生徒と位置づけるべきである。このスタンスで生徒を支援しなければ、生徒は再び目標を失つ可能性もある。

無目的症候群は

特集

進路指導で 教えるか

職業研究のための具体的取り組み

『職業まるわかり事典』の活用
このほか、職業に就くための道筋を紹介した本などを読む。

図書のおすすめ

読ませたい本は大きく分けて「生き方を考えさせる本」と「職業観育成の本」。自主性に任せておくの本を読まない生徒もいるので、例えば国語科の教師と連携して図書名を指定する方法もある。また、この時期に長い文章を読んでおくことは、その後の小論文学習にも役立つ。

講演会の実施

職業観育成や人生を考えるのに役立つ講演会を行う。そういった行事が学校として組まれていない場合、最近は講演会ビデオがいろいろと出ているので、それを担当がクラスで見せる方法もある。

職場訪問

家族や知り合いを頼って職場を訪ね、働くということについて考えさせる。また、保護者や社会人を学校に招き、仕事について話してもらう。

裁判所や公的機関への社会見学

ボランティア活動への参加
レポートを書かせる

職業について自分の考えをまとめさせたり、自分が調べてわかったことなどを書かせる。書くことで自分自身を客観視でき、さらに生徒間で相互に読み合えば、他者の職業観から刺激を受けることにもなる。

学部・学科研究のための具体的取り組み

大学案内の活用
最近の大学案内は学内内容が詳しく書いてあるので、その学部・学科固有の研究内容を把握できる。

シラバスの活用

大学案内以上にどんな教授がどんな研究をしているかが詳細にわかる。高校から「生徒の大学・学部選択の一助として1部分けていただきたい」と請求する。

卒業生の講演会

オープンキャンパスへの参加
人づての情報に比べて、自分の目・耳・肌で感じるこの方が、訴えかけが大きい。オープンキャンパスの白でなくても、大学に行つて学生に大学の様子などを聞いたり、雰囲気を感じたりするのもよい。大学の飾らない姿が体験できる。

『学べる大学探せる事典』の活用

興味のある学部・学科が設置されている大学を調べてみる。

レポートを書かせる

研究内容、興味のある講義など、調べてみてわかったことを書かせ、発表させてみる。